一　悲恋には縁無きごときさくらんぼ
二　私だけ知つている場所著莪の花
三　浮き沈む人の世を見て楠若葉
四　夕薄暑海に来て身の置きどころ
五　江ノ電の通る軒先新樹光
六　雨粒の紫陽花色に染まりけり
七　行く春を竿の雀に覗かるる
八　花あやめ祖母は小舟で嫁したると
九　鉄線も今年は早し花日記
一〇　花蜜柑白を極めて散りにけり
一一　夏燕額に光を乗せて来し
一二　母の日の物干し竿の年季かな
一三　向日葵を画布にとどめて逝きにけり
一四　遊歩道砂に消されて浜昼顔
一五　新緑を遠くまで見て沖のあり
一六　十薬や昼を過ぎてもまだ眠い
一七　十薬や気象予報士また外す
一八　山間の畑にひとり桐の花
一九　新樹光道の遠さをまた聞かれ
二〇　燕子花憂きこと多し世の中は
二一　イマジン流る出窓の外やリラの花
二二　竹伐るをひと日眺めて雛買う
二三　目覚め良き島泊まりなり花蜜柑
二四　いたつきの人の背中や水芭蕉
二五　天窓につのる雨音蕗を煮る
二六　百合よ百合つれなく横を向くなかれ
二七　柿若葉餓鬼大将の裏庭に
二八　十薬やどこでもいつも雨女
二九　紺紫陽花切れば夕闇濃くなりぬ
三〇　小判草今日でお通じ解消す
三一　玉葱をじつくりと煮る家時間
三二　緑陰に来て輪郭を失へり
三三　浜昼顔波音に見る昼の夢
三四　小海線真白き富士に風薫る
三五　一人酔ふ夜を裂き捨てはたた神
三六　師に迫る一詩未だに泰山木
三七　車前草の花子どもの遊び思ひ出す
三八　紫陽花の色にじみたる雨上り
三九　湘南の秘密の浜の浜大根
四〇　終電逃す夜のどくだみの花白し
四一　たかんなを提げ夕星の近きみち
四二　蚊遣火や肴ひとつに足る生計
四三　麦の道我を抜きゆく雲の影
四四　老衰やくづるる薔薇の堪へんとす
四五　夏シャツでゆく江の島の展望台

四六　落日や万緑影となりにけり

四七　峠まで薄雲続く桐の花

四八　雨の香や蜜柑の花の終るころ

四九　ショパン流して一日卯の花腐しかな

五〇　藤咲いて今年は母を訪えぬまま

五一　椚若葉ぬつと現る白き富士

五二　げんげ一面小屋には堆肥溢れをり

五三　どくだみの根の純白をたどりけり

五四　鳩歩く五月の芝のやはらかく

五五　薔薇を刺し銀巴里跡と思ひけり

五六　マーガレットあちらこちらで背伸びして

五七　をみなごの髪はカールす梅雨近き

五八　もの言はぬ夏草たちに分け入りぬ

五九　老いてなほ確かなあゆみ花菖蒲

六〇　夏蓬背伸びして飲むハーブティー

六一　富士覗く丘陵畑の菖蒲かな

六二　蕗煮るや早世したる詩兄ゐて

六三　新樹晴れ渋沢丘陵人もなく

六四　かの空へ泰山木の花開く

六五　血圧計外せば卓の蟻奔る

六六　昨夜の風絡まりあふて母子草

六七　筍や今年不出来の文が添ひ

六八　林檎咲く岩木山より汽車着きぬ

六九　いつ見ても浜昼顔の紅が好き

七〇　花みかん駅より弧なす相模湾

七一　或る雲を向日葵畑に見失ふ